

第4回 絹谷幸二賞

若手画家を支援し、具象絵画の可能性を開くことを目的にした第4回絹谷幸二賞(毎日新聞社主催・三井物産協賛)は、後藤靖香さん(30)に決まった。奨励賞には指田菜穂子さん(28)が選ばれた。贈呈式は16日、東京都千代田区の如水会館で行われる。

後藤靖香さん

国立国際美術館でのグルー(11年)など、活躍が目立つ。展覧会の庭への出品(2010年)やVOCA奨励賞(04年)の京都精華大卒業後、若き日の祖父や大叔父にと

ての戦争というテーマを、劇画調で描くようになった。若い女性が戦争を描く意外性から「ずっと続けるのか」「他のものは描かないのか」と問われることも。しかし自



ことう・やすか 1982年、広島県生まれ。夫と京都から広島県北広島町に移住し、制作に打ち込む。—西村剛撮影

2011年の展示風景。キャンバスに墨汁、顔料ペン、ジェッソ、各210×900mm—おおさかカンヴァス推進事業(主催・大阪府)事務局提供



「普通の仕事」たたえて

身は「テーマは変わる時が来れば変わるんだろうなあ」と思っていました。その「時」となったのが、授賞対象の展覧会「床書キ原寸」(大阪市住之江区)との出会いだ。1970年ごろまで稼働していた造船所跡地を見学し、床に船の設計図が残る「原図場」に足を踏み入れた時、そこで懸命に働いた人たちの姿が見える気がしたという。探業中の造船所の見学や、原図場の元職人への取材もした。高度経済成長期という時代を意識したことはなかったが話を聞き調べるうちに「こんな時代も、普通に仕事をする普通の人たちが支えているのだ」と感じ、素描を重ねたという。



「ほろよい」 2011年 キャンバスにアクリルグアッシュ、112×145.5mm、高橋コレクション—西村画廊提供

奨励賞 指田菜穂子さん

「候補に挙げられていたのだからには本賞を狙っていたので、残念です。ありがちな「喜びの声」にしない姿勢が、絵にかける情熱の深さを感じさせる。昨秋、東京・西村画廊の個展で発表したのは、「絵画で百科事典をつくる」というテーマに基づいた新作11点。旅や夢、基々としてリアルな言葉から、古今東西の文学・美術、現代世相の多彩なモチーフを紡ぎ出し、画面上でつなぎ合わせ

絵画でつくった百科事典



さしたなほ 1983年 埼玉生まれ。早稲田大政治経済学部卒。東大大学院修了。同県所沢市在住。—川久保撮影

対照的な2人の受賞者

山下裕二・明治学院大教授

後藤靖香さんと指田菜穂子さんは、対照的な作風の作家だ。前者はとてつもない大画面に、モノクロームでグイグイ描く。後者は比較的小さな画面に、カラフルで緻密な描写を駆使する。この両者に対する授賞は、今回の選考がある特定の皮相的傾向を称揚しようとするものではない、とこのことを示している。美術に

強度ある絵画世界

OJUN 画家 東京芸術大准教授

後藤靖香さんの作品は全作品中抜きん出ている。またテーマとしている戦争や造船所の歴史に対して独自の視点と距離感を働かせ、作品それ自体が後藤中観とも読めて興味深い。指田菜穂子さんの作品は、見絵で見る百科事典ともいえる楽しい絵だ。しかし画面いっぱい描かれた夥しいオブジェの乱立と整然はすべてが正面視の配置で見手に向かってきてとも挑発的だ。2人は作品のスケール、色彩において対照的だがどちらも強度のある絵画世界を描き出している。他に、

頑固なまでの独創性

原久子・大阪電気通信大教授

昭和の少年マンガを思わせる後藤靖香の力強い画面は、実物を前にするとその気迫に圧倒される。彼女にとってのある種のヒーローが描かれている。たとえ作品のコンセプト(物語)を知らずとも、未来に食らいつこうとする鋭いまなざしが、今という時代に強固なメッセージとなって飛び出してくる。一方、指田菜穂子さんは絵の世界的な世界観が画面として描かれ、その複雑なような画面を読み解くことで、糸をたぐり寄せるように面白さが伝わる。全く異なる方法で表現に取り組む2人に共通するのは、不確かさのなかにか何かを見つけようとするのではなく、各自の表現のオリジナリティーを作り上げた頑固なまでの姿勢かと思う。今後の展開にも大いに期待したい。

選考経過 21人対象に

45人に推薦依頼を発送、22人から回答を得た。候補者として推薦されたのは、22~35歳の男女21人(うち1人は2人から推薦)。北海道から沖縄在住者までがそろった。候補者にポートフォリオ(経歴や作品写真をまとめたファイル)を送ってもらい、事務局が選考委員3氏に発送。選考委員はそれらを精査し、展覧会などで鑑賞可能な作品については、足を運んで実物に接した。

1月中旬の1次選考は、各委員が数を限定せずに意中の作家を挙げることから開始。その後、全員が作品について議論を重ねた。「意欲的な試みの有無」などの視点で絞り込み、石井、樫木、黒崎、後藤、指田、箱嶋が2次選考へ。このうち実作品を見られなかった候補者については、在籍する大学院や所属画廊を委員が訪問。昨年発表された作品の一部を鑑賞した。

2月初旬の2次選考では、最初に各委員が評価する2、3人を提示。オリジナリティーなどの見地から最終的に樫木、後藤、指田が残った。その後は、全員が推した

◆推薦された人たち

Hyon Gyon、會田千夏、石井友人、奥谷太一、樫木知子、金子富之、鹿野震一郎、菊谷達史、黒崎香織、後藤靖香、小橋陽介、小林孝一郎、指田菜穂子、設楽陸、中岡真珠美、箱嶋泰美、村山春菜、山川さやか、由井武人、吉永有里、和田典子

◆回答を寄せた推薦者

尾崎信一郎、翁長直樹、加藤義夫、鎌田享、岸桂子、木ノ下智恵子、竹口浩司、手塚さや香、名古屋寛、野地耕一郎、林洋子、土方明司、福住廉、藤田一人、松井みどり、松本透、村田真、本江邦夫、森本悟郎、山口裕美、山本淳夫、和田浩一(いずれも50音順、敬称略)

日本を代表する画家の一人で日本芸術院会員の絹谷幸二さん。写真が2008年「若い世代を応援したい」と賞創設を毎日新聞社に呼びかけ、創設。絹谷さんは1974年、具象絵画の登龍門であった安井賞(96年度の第40回で終了)を31歳で受賞。画家として生きる自信を得たという体験が

絹谷幸二賞



ある。創作の傍ら、東京芸術大などで後進の指導にも力を注いできた。現在は大坂芸術大教授を務める。賞の対象は35歳以下の画家。国内で前年に開催された展覧会への、具象的傾向の出品絵画を応募する。毎日新聞社が全国的美術館学芸員や美術評論家、ジャーナリストに推薦を依頼。回答をもとに、3人の選考委員が2度の審査を経て決定した。賞金は本賞100万円、奨励賞50万円。